

分科会
幼 稚 園

第 1 分科会
粕屋町立大川幼稚園

研究主題

心身ともにたくましい幼児を育てる運動的な遊び

- 友達と一緒に心と体を弾ませ、遊びを広げる環境の工夫 -

粕屋町立大川幼稚園

1 研究発表の概要

発表者：粕屋町立大川幼稚園 教諭 田中真智子

(1) 主題設定の理由

現代は少子化、都市化、情報化による、幼児の遊びや生活習慣の変化により、運動的な遊びや体を動かす機会だけでなく、経験する動きの種類が減少化している。本園で5月に実施した生活実態調査のグラフを見ると、家の中で遊ぶことの多い実態や兄弟と遊ぶことが多い実態がわかり、体を動かす遊びの機会も減少していることが想像される。こうした状況から「色々な遊びの中で十分に体を動かす」ことが、ますます重要であると考え。

しかし、ただ体を動かせばいいということではなく、「自ら環境にかかわって体を動かそうという意欲を育てる」ことによって色々な遊びが展開され、その中で十分に体を動かすことができるのではないかと考えた。

福岡大会の趣旨より、本大会の主題が「運動する喜びを味わわせ、体育的学力の確かな定着を図る体育授業の創造」と設定された。幼児が、生涯にわたって運動に親しみ続けるために必要な資質や能力は教師が一方向的に与えるのではなく、幼児が運動の特性や魅力に十分に触れながら、自らの意思によって指導内容を獲得した時、初めて日常生活の中で生きて働き、生涯にわたって運動に親しみ続ける力として獲得したと考える。つまり、「できる」「わかる」「かかわる」「活用する」喜びに浸りながら、指導内容を獲得していく保育活動を展開していくことが必要と考え、幼稚園でも、運動の特性や魅力に触れながら幼児が旺盛にしていく内的エネルギーを、このように捕らえた。

【できる喜び】・・・「もっとできるようになりたい」「やった！初めてできた！」というように主に「技能」を習得する過程で味わう、意欲や自信につながる喜び。

【わかる喜び】・・・「こうすればいいんだ」「こうしたらできたよ」というように、主に「知識・技能・判断」を習得する過程で味わう喜び。

【かかわる喜び】・・・「ルールを守ると楽しい」「色々な人とやってみよう」というように、遊びで様々な経験をする中で、特に「態度」を育む過程で味わう喜び。

【活用する喜び】・・・「これとこれを組み合わせたら、もっと楽しくなる」など、組み合わせたり組み替えたり加えたりする遊びの再構成するように、身に付けた「技能・態度・知識・思考・判断」などを生かす過程で味わう喜び。

(2) 主題の考え方

「心身ともにたくましい」こととは

幼児期は、基本的な生活習慣や安全についての習慣や態度を身に付けていく時期である。心と体の健康は、相互に関連し合っているものであり、情緒が安定している幼児は、積極的に環境にかかわって、自ら体を動かして遊ぶ幼児である。幼児の心と体の健康は発達の基盤であり、発達の側面に反映している。心身の調和は、さらに多くの動きを身に付け数多くの体験をする機会に繋がると考えた。

心身ともにたくましい幼児の姿を次のように捉えた。

何事にも積極的でやる気や意欲・好奇心がいっぱいである。

自分の思いを出し、心と体を弾ませて、思いっきり自己を発揮している。

自分から友達を誘って一緒に遊び、行動範囲が広がっている。

できた喜びに自信を持ち、工夫しながら何度も挑戦して自分なりに試している。

我慢強く、くじけることなく最後までやり抜こうとしている。

「運動的な遊び」とは

体力や運動能力のみを強調し過ぎると、遊び本来の自由な発想や楽しさの追及につながらない場合もある。幼児の主体性を引き出しながら、生活とのつながりのもとに育てていくことを思うと特定の運動に偏らず、心と体が一体となって楽しく身体を動かす遊びと考えた。

留意点として、

- ・ 幼稚園における「運動」が、学校教育の「体育型」となり、他の活動や遊びと切り離されて教師の指導先行にならないこと。
- ・ 「・・・練習」「・・・運動」とかひとつの運動が単一的に取り上げられ、一人ひとりの幼児が好む、好まざるにかかわらず“やらせ型”“訓練型”にならないこと。
- ・ 能動的な動きよりも運動技能の要素が系統化されすぎて幼児に向けられることにより、運動嫌いや抵抗感を作り出すことがないように、幼児一人ひとりに運動の喜びや体を動かす楽しさを大事にすること。
- ・ 幼児にとっての運動は、身体手による自己表現、つまり心と体が連動する姿であって、技術の習得や能力向上はその姿の中に現れる。したがって幼稚園での保育は、技能や能力向上を優先しすぎないこと。
- ・ 保育においては、遊具や運動用具などの環境構成に教師の意図を仕組んでいくことが大切である。その環境にかかわって体を動かす時の活動の中に、運動や体作りの姿が現れるように捉えること。 と考えた。

ファンタジーの世界に入り友達とイメージを共有すると、自分と違ったものに成りきって自然に体が動く。

何度も挑戦していくと、工夫が生まれ楽しくなり、より高い目標を持つようになる。

精一杯の力で競い合うと、スリルや悔しさを味わい、次への意欲に繋げている。

このように幼児の主体性を引き出しながら、生活とのつながりのもとに育てることを大切にしたい。



「友達と一緒に心と体を弾ませ、遊びを広げること」とは

幼児の遊びが展開されていく中で、幼児や教師が思いを伝えたり体を動かしたりしながらかわり合っていくと、イメージを共有することが出来る。一緒に楽しさから教え合ったり認め合ったりすることも味わうことが出来る。また、様々な活動・用具などに興味を持って取り組むことで、幼児は持っている能力を生かし、自己の充実や自信につなげて、心や体を弾ませながら遊びを繰り返していきのではないかと考えた。

友達と一緒に心と体を弾ませ、遊びを広げている幼児の姿
教師や友達と安心して触れ合いながら、いろいろな活動に取り組んでいる。

いろいろな遊びに興味関心を持ったり、友達と誘い合ったりしながら遊んでいる。

いろいろな遊びに意欲的で、思い切り体を動かしている。
戸外へ飛び出し、太陽の光を浴びながら自然を活用して遊んでいる。

友達の良さや思いを認め合って遊びを作っている。

ルールを守りながら挑戦している。



「環境の工夫」とは

幼児が生き生きと活動を展開していくには、その活動に適した環境が必要となる。適切な環境は幼児の思いや教師の願いによってイメージが発展し変わっていく。活動の中で幼児がどのような会話をして動いているのかを知って、どのような環境が必要か判断していくことが大切であると考えた。そこには、幼児の発達を考慮することも含まれる。

安心して取り組める場面にしていく。安全であることを確認していく。

発達段階に配慮した状況にしていく。4歳児・・・ぽっくり 5歳児・・・竹馬を保護者と一緒に作成して、日頃の遊びに組み入れていった。

バザーで経験した輪投げ遊びを再現して楽しく遊べるようにしていく。

新聞紙で作ったたくさんの棒を、友達と一緒に試行錯誤していけるようにおいて置く。

幼児の自由な発想を生かして、幼児の選択・見直し・作り替えなどに応じていく。

いろいろな人とかかわれる場面にしていく。ウレタン積み木跳びから友達が積んで自分が積むような、積み上げて落とすゲームが始まった。

魚になって、くらげに刺されないように慎重にくぐっていくように、物を見立てることや場面・人の雰囲気などのイメージに近づけるようにしていく。

このように、幼児一人ひとりの発達や内面を考慮しながら、今“何を育てたいのか”“どんなことを経験させたいのか”ということや教師の願いを環境の中に意図的に仕組み、保育を展開していかなければならないと考えた。



4歳児 ぽっくり



5歳児 竹馬

(3) 研究のねらい

「日常の遊びの中で、環境にかかわって体全体を動かす心地よさや楽しさを味わう」として

(4) 研究の仮説

「用具とのかかわりや日常的に耳にしている音楽・自然界の音や体感などの刺激によって幼児の心が動く。その中で、

教師が意図的に遊びの再構成を行ったり、環境を準備したり、教師がかかわったりすることで、幼児はいろいろな動きに興味関心を持ち、友達とともに身体を動かして刺激を受け合い、共感し合えるようになるであろう。それらの楽しい経験を蓄積することであらゆる面で生き生きと輝き、心豊かなたくましい幼児を育成できるであろう。」とした。

(5) 研究の方法と内容

園庭の遊具、用具などを使用しての遊び方を探り、再構成に意図的工夫をしていく。

幼児が遊びを展開する中で心が弾む遊びを捉え、教師が身体的活動へどう接していくか保育を通して明らかにしていく。

意図的な遊びの再構成

- ・活動の見通しを持ち、幼児の何を育てたいか、どんな経験をさせたいかを考慮して意図的に幼児がかかわっていくように仕向けたり、遊びの内容を共通理解して、手順がわかり自分で考え工夫していくようにしたりと、ひとつのルールから面白さを求めてルールを付け加えたり変えたりしていく。多くの友達と関わりが持てるようにストーリー性がある遊びの中に目標を持ち、達成へ向けて役割分担や協力をして遊びを発展させていく。

用具、遊具の準備・自然の活用

- ・自らイメージを持ち、友達と一緒に用具や遊具を使用して遊びを工夫し、組み替えながら自己発揮できるようにする。
- ・五感で感じる音楽や自然界のものを効果的に活用する。
- ・用具や遊具からイメージを引き出せるように見立てて活用する。
- ・作ったり組合わせたりして、遊びに必要な物は扱いやすく作りやすい物を選択していく。
- ・用具や遊具の配置を考える。(使いやすい場所 片付けやすい場所)



用具や遊具を準備したり、自然を活用したりしていくことで、友達と一緒に何かに見立て、遊びを工夫し、イメージを引き出しながら自己発揮でできるようにしていく。

教師のかかわり

- ・楽しく体を使って遊ぶことを心がける。
- ・幼児の興味関心に目を向け、イメージを引き出して主体的に遊びや活動を展開していくように配慮する。
- ・ありのままの姿を受け止め、自己の充実や存在感を味わわせる。
- ・幼児の言葉に耳を傾けて、思いを生かしていく。
- ・遊びの積み重ねを大切にして、遊びを展開していくときに組み入れていく。
- ・幼児と共にアイデアを出し合いながら一緒に遊びを進めていく
- ・用具や遊具にかかわらせるときのタイミングを考慮する。
- ・時には演じながら遊びの広がりにかかわっていく。
- ・その場に応じた言葉をかける。

「やってみようかな」「どうしようかな」と躊躇している時や遊びに入れない時・試行錯誤している時・遊びが広がっている時など『先生が見てあげよ、頑張っ！』『すごいねえ！楽しそう！』『できるのが楽しみよ』というように、幼児が安心して、認められて嬉しかったり楽しみにしたり自信を持ったり出来るように、幼児に寄り添いながらその場に応じた言葉掛けを意識していった。



幼児の興味関心や言葉に耳を傾けて思いを生かしたり、教師自身が幼児とともにアイデアを出し合いながら楽しく体を使って遊んだり、教師がかかわるタイミングやその場に応じた言葉掛けなどを大切にしようと共通理解に努め取り組んできた。

(6) 研究の成果と課題

成果

友達と一緒に心と体を弾ませ、自分達で遊びを広げて楽しむ姿を引き出すためには、次のような「環境の工夫」が有効であることがわかった。

意図的な遊びの再構成からは

- ・ストーリー性のある遊びの中で主人公になりきることで、活動に見通しが持て、意欲的に遊ぶ姿に繋がったこと。
- ・遊びの中で、意図的に体を動かす要素を盛り込むことで、自然に体が動き、体を動かす面白さを繰り返し味わうようになったこと。
- ・どうしたら面白くなるかなど、友達と考えを出し合う場を設定したことで、お互いに認められるようになってきたこと。

遊具・用具の準備、自然の活用からは

- ・普段の生活の中で、体を動かしたくなるような環境を教師が用意したり、幼児の目に触れやすい場所に遊具や用具を置き、自分たちで取り出せるようにしたことで、幼児の遊びへの意欲を高め、主体的な動きを引き出すことにつながったこと。

教師の関わりからは

- ・教師が遊びを発展させるヒントを示したりして、幼児とかかわりながら一緒に遊びを広げることによって、幼児が自ら体を動かす姿が変わったこと。
- ・遊びの中で教師が掛ける賞賛や励ましの言葉で、幼児自身が「できた」という自信につながり、充実感に満ちた生き生き知った表情が見られたこと。
- ・町内4幼稚園共通の身体的活動の年間計画を作成したことで、発達に応じた動きを把握しやすく、遊びの中に取り入れることを意識しやすかったこと。

課題

- ・幼児の発想を尊重しながら、多様な動きを引き出す環境作りは十分であったか。
- ・一人ひとりの発達を明確化し、より意欲的に挑戦していけるような環境構成や教師のかかわりはどうであったか。
- ・幼児の実態を知るためのアンケートや運動機能テストと幼児の心と体が動き出すような遊びとのつながりを十分に把握できたのか。

幼稚園生活の充実のためにも保育の振り返りを行い、職員が研鑽を積んでよりよい連携の下で保護者は勿論、地域とともに健やかな幼児の育成に取り組んでいきたい。

(7) 実践発表

実践事例を中心に

発表者：粕屋町立西幼稚園 教諭 富田 富美

長年継続してきた粕屋町立四幼稚園持ち回りによる研究会を共通化して、平成20年度より共通主題を「心身ともにたくましい幼児の育成をめざす保育の創造」として副主題は各園で設定して四幼稚園が一体となってこの大会に臨んで来た。なお共通主題は、平成22年に指導受けて「心身ともにたくましい幼児を育てる運動的な遊び」と焦点化した。

(1) 一年次(平成20年度)・・・仲原幼稚園

「心と体を弾ませる」ということと、幼児期の発達に適応した「身体的活動を通して」といったことが提唱され、教師の意図性を遊びの中に仕組んだ事例、遊び環境を意図的に変えた事例、友達とのイメージが通い合って身体的活動へと広がっていった事例などが、幼児の姿の映像とともに具体的に示された。

(2) 二年次(平成21年度)・・・西幼稚園

「環境づくり」と「教師のかかわり」に力点を置いていくことにした。特に取り組んだ幼児たちの興味や関心を誘い、体を動かすことを日常化・生活化することを意図して園舎・園庭環境について工夫してきた。

園舎内環境

- ・入園して間もない4才児がバイキンマンめがけてジャンプして、球を投げているが、親しみやすいキャラクターを保育室の遊び環境にした事で、興味がわいてきた。
- ・4歳児。モンスターボールを触りたいという思いから、ぐっとひざを曲げてジャンプするタイミングをうかがっている姿がよく現れている。
- ・保育室の出入り口や廊下に高さを変えて、吊り下げる環境を準備し、飛び上がって触れると音が出るような鈴などを吊り下げると幼児たちは、「見てみて、この高いところもタッチできるよ」と、日頃の生活の中で、競い合って自分のジャンプ力を試していた。
- ・遊戯室の広場に画用紙でハスの葉を作っておいていたところ、「カエルさんは、しゃがまんといかんよ」と言いながら、カエルになりきって、葉っぱから葉っぱへと跳び渡っていった。教師のアイデアから幼児の興味を誘い、日々の生活の中で、体を動かす環境となっていくのだと思った。

園庭環境

- ・ジャングルジムの頂上に旗を立てておくと、「ほら、登ったよ！いちばんよ！」と言って嬉しそうに旗を振って友達に知らせていた。
- ・登り棒の高さによって色を変えたビニールテープを巻いておくと、「もう少しだ」と自分ではやや難しいところまで、踏ん張りながら登った。
- ・雲梯に1・2・3・・・と数字をつけておくと、一つでも先に進めるように取り組んでいた。
「手が痛くなってきた・・・でも4のところまで頑張るぞっ」などと、自分なりの目標を持つようになった。友達と遊ぶ中で、挑戦する気持ちや、楽しさが高まっていく姿が心と体が連動している姿に伺えた。
- ・門の入り口や土間などにペンキやホースを使って丸を作ると「片足ケンパーで幼稚園に来たよ」と言って登園して来たり、「ケンパーして通れるよ。ほらしてごらん」と言ったりしながら友達と楽しく遊ぶ。バランス感覚が無理なく養われ、活動意欲を促す環境になっているなど教師同士で喜び合った。
- ・大タイヤをブランコに替え吊ると、ぶら下がって遊んでいる幼児たちは、腕の力や体に力を入れるタイミングなどが楽しさの中で育っているように思えた。
- ・園庭の固定遊具に渡した紐にビニールを下げて、越えなければ通れない状況を作ると、そこを飛び越えて追いかけてくる幼児が現れ、面白くて仕方がない状況となる。

- ・ 幼児は物を投げたりあてっこしたりすることを好むことを生かし、園舎の壁面に狸や口ケツなどの的を作る。的を目当てに的確に投げることや体の動きなどが、このような環境の中で、遊びを通して自然に養われていくことを願っている。

(3) 三年次(平成22年度)・・・大川幼稚園

- ・ 研究の概要の中に含む。

2 協議会

(1) 公開保育自評

4歳児「自分の思いを出しながら、友達と一緒に体を動かして遊ぶ」

5歳児「友達と一緒に、イメージを広げながら伸び伸びと体を動かして遊ぶ」

4歳児ぱんだ組

楽しさが感じられるよう昨日話し合い、ロープ渡りではもっとロープをつけたいという思いで付け足したことで、渡ったりくぐったりする姿が出てきていた。本日は、よりかかわりたいという気持ちを引き出すために、タッチすると音が出る環境を準備していたが、あまり目立たなかったようがかかわる姿がなかった。休みがちであまりかかわろうとしなかったH児が、今日はやってみようとする姿があった。個人差に応じて遊び場を変化させていく必要がある。

4歳児うさぎ組

もう出来るからとしない幼児や怖がる幼児に対して、認めたりタイヤやブランコを足したりし、したい気持ちを引き出していった。本日は、ロープにぶら下がるようになったことで自信がついたT児がいた。今後も、幼児の気持ちを考え、安全面にも配慮しながら思いきり体を動かせるようにしていきたい。

5歳児さくら組

固定遊具に挑戦しながら、しっかりと体を動かしてほしいと取り組んでいる。その中で、友だちの頑張りにも気付く姿が見られている。本日は、いつも消極的な幼児から「ねことねずみがしたい」という声が出て楽しめていた。遊具を出しすぎて目が向かない環境を改善したが、今後もまだ興味を持っていない幼児への誘いかけをしていきたい。

5歳児すみれ組

本日は、友だちの応援をしていたA児が、のぼり棒に挑戦し半分まで上れたことが自信になっていた。また、「バナナとりゲーム」の中で、チーター役の休憩所を考えてほしいと願っていたので、砂場で休憩することや、サルの休憩しているジャングルジムのまわりにラインを引くことなど、自分たちで考える姿があった。今後も、自分たちでこうしようと考えあうことを積み重ねていきたい。

(2) 協議内容

幼児が、主体的に遊びを創っていけるような教師のかかわり方

【質疑応答】

Q：5歳児になるとイメージを共有して遊びを進めていくが、全体の場でのイメージの共有は難しいので、遊びのメンバー構成など、配慮されていることを聞かせてください。

A：遊びのイメージの共有化は、運動会のテーマが「ジャングル」だったことや、エルマーの冒険の絵本を2クラス共通で読んだことで、共有できてきた。

遊びの細かいイメージは2クラスで違っていたが、遊ぶ中でだんだんと登り棒はヤシの木、雲梯はサルなど2クラスが共有化していった。メンバー構成は、並んだ順にしていたのが、混雑してきたので、好きなところできるようにした。

Q：3年間取り組んできて、今の子どもの姿として、どういうところで心と体がたくましく育ってきていると感じるか具体的に教えてください。

A：入園当初は不安定だった幼児も、少しずつ気持ちの切り替えが出来るようになってきた。教師とのかかわりを求めがちだった幼児も、友だちとかかわれるようになってきて、意欲や楽しさにつながってきていると感じる。

入園当初は、自分は出来ないから、思い通りにいかないからとその場からいなくなる姿があったが、ちょっと高いところから飛び降りられたことが違う場でもやってみようとする姿につながる。友達同士でも応援する姿がある。

Q：のびのびと活動している子どもたちだが、自分の遊びたいコーナーへ行くことを想定したときに、安全面への配慮はどのようにされているのですか。

A：安全面に対しては、気がついたところはお互いに情報交換している。安全点検をしたり、小石拾いをしたり、保護者にも連携を取ってごみ拾いをさせていただくなどしている。裏庭のロープは消防の方に結んでもらったり、点検してもらったりしている。また、毎日大人が乗って確かめ点検をして保育にあたっている。

3 指導助言

指導助言者：中村学園大学 教授 田中 浩子先生

運動遊びが子どもにとってどんなものなのか

(1) 現代の子どもをとりまく問題点

子どもの生活の変容【群れ型から孤立型へ】

- ・遊びが変わった。何人が 一人・屋外から 屋内・体を動かす 動かさない・玩具を使わず
メカに囲まれて・創意工夫 受身の形で・子どもだけ 大人の関連でなど

少子社会【少子化が教育に及ぼす影響】

- ・子どもの切磋琢磨の機会の減少
- ・親の過保護・過干渉
- ・子育ての経験や知識の伝承の困難
- ・学校行事の部活動の困難
- ・良い意味での競争心が希薄（競争心は活用意欲にエネルギーになる）

子どもの体力と運動能力の問題

- ・幼児期の運動発達の特徴・・・日頃、活発に動き回っている幼児・戸外遊びが多い幼児・運動遊びをよくする幼児は友達も多く運動能力測定にもその結果が現れている。
- ・運動は子どもの心身の統合的発達に関係・・・運動をコントロールする能力 調整力(巧みさ) 基礎的運動技能は幼児期の遊び体験の差が大きい。例として木登り・いろんなところにぶら下がる・高いところののって遊ぶ・斜めのところや崖を駆け下りる遊びなど

〔 脳機能と運動の関係
海馬に対する運動効果の研究 〕

(2) 幼児期の教育の重要性

- ・幼児の主体的な活動を確保していくことには、教師がどんな願いを持って、どうしたいのかを
しっかり持って指導を行うこと。